

論説

舜子変文類写本の書き換え状況から見た五代講唱文学の展開¹

荒見泰史

はじめに。

「舜子変文」といえば、敦煌通俗文学類中においては最も代表的な作品の一つとしてたびたび注目を集め、研究論文もこれまでに多く発表されている。なによりもこの説話が古代の典籍に多く見られ、また後代にも長く親しまれて『二十四孝』にも収録される話となっていることから、舜子という孝子説話の歴史的変遷の研究にこの舜子変文も唐五代の貴重な資料としてしばしば取り上げられてきた訳である²。兎も角、この舜子変文が唐五代における貴重な文学資料としてこれまで認められてきたことは間違いがない。

しかし、敦煌変文研究のなかでは、意外にも、舜子変文は例外的な作品であるとされ、それほど重視されてこなかったということもまた事実である³。例外とされる理由は、多くの変文で使用する散文と韻文を交互に配する「講唱体（あるいは説唱体）」とは異なる「散文体」を用いているという事情による。というのも、多くの研究者が変文の大部分が講唱体であることから変文は講唱体でなければならないという考えを持ってきたからである。では散文体で書かれているとされる舜子変文は変文ではないのだろうか。敦煌文献の舜子変文類の作品の題名にはたしかに「変」あるいは「変文」と書かれているのだが、これはどのように解釈すべきか。そもそも変文が講唱体でなければならないという学説は正しいのか。これらの点は未だに解決されていない問題なのである。

ではなぜ現在のような学説となっていたのであろうか。本論に入る前に、変文研究のこれまでについて簡単に触れておきたい。

実のところ、舜子変文は敦煌文献が発見されて以降変文の名称をもって刊行された資料のなかで、最も早期に紹介された資料の一つである。翻刻資料である劉復氏の『敦煌掇瑣』（1925年）では、すでに P.2721V の全文が紹介

されている⁴。P.2721V は前半部分が欠けているものの、当時語られていた舜子の故事の半ばから末尾までが、六言賦体を混合する散文体で残されている文献である。尾部には真題として「舜子至孝変文」の一行が残されており、『敦煌掇瑣』においても『舜子至孝変文』の名称で翻刻が掲載されている。中国文学史上、重要な位置を占める「変文」の名称は、近代の学術としてはここにおいて初めて使用されたことになる。

周知のごとく、この当時の日本では戯曲小説の研究が主流であり⁵、中国でも文学革命期にあたり通俗小説を主体とする文学史観が模索された年代であった。そこに狩野直喜氏「支那俗文学史研究の材料」（1916年）、王国維氏「敦煌発現唐朝之通俗詩及小説」（1920年）などの論文と目録によって敦煌の通俗文学作品が紹介され、さらには羅振玉氏『敦煌零拾』（1924年）によって俗曲三種（現在に言う講唱体類『降魔変文』、『歡喜国王縁』、『維摩経講経文』）が録文によって公刊されるに至り、敦煌の通俗文学作品は通俗文学史上唐代における重要な資料として注目を集めることになったのである。同時にまた「宋代話本」、「明清小説」のように唐代の通俗文学作品に与えるため総称も模索されていたので、『敦煌掇瑣』に『舜子至孝変文』が公開されるに及んで、「変文」がそうした唐代通俗文学作品を代表する名称として用いられる傾向が見え始める。たとえば胡適氏が『海外読書雑記』（1927年1月）に『維摩詰経変文』の名称を用いているのはそのような流れによるものである。

しかし、続いて敦煌文献から講唱体作品である『目連変文』、『降魔変文』などが陸續と発見されるにおよび、散文体の舜子変文は徐々に変文としては例外であると見られるようになっていく。たとえば、『目連変文』や『降魔変文』といった名称があらわれるのは公刊された資料としては青木正児氏「燉煌遺書『目連縁起』『大目乾連冥間救母変文』及び『降魔変押座文』に就て」（1927年）と倉石武四郎氏『『目連変文』紹介の後に』（1927年）以降のことであるが、その論文において両氏は『目連変文』と『降魔変文』が、散文と韻文を交互に配置する講唱体という文体であり、後代の弾詞などに通ずる講唱文学作品の祖型であるということを再三強調されている。確かにこの文体はいかにも講唱文学的であり、また後世の通俗文学とも明確な類似点が見られるために、「唐代変文」の名称とともに一躍注目を集めるようになった

ことは容易に理解されるであろう。かくて、これをうけた鄭振鐸氏『敦煌的俗文学』（1929年）、『挿図本中国文学史』（1932年）、『中国俗文学史』（1938年）を通じて、「変文」の名称は、文学史上不動の地位を得ることになるのである⁶。

その間、舜子変文の研究でも新たな発見はあった。狩野直喜氏、向達氏の調査によって、S.4654『舜子変』が発見されたのがその最大の成果であり、向達氏「記倫敦所蔵の敦煌俗文学」（1937年）中に題目が紹介されている。この写本は「舜子変」の首題と、舜子故事の前半部分のみを残す残巻本であったが、文体は比較的整った六言体を基調とする賦体であった。ここでは通俗文学でもよく用いられる賦体を中心に変文研究があらたな進展を迎える可能性があった訳である。しかし内容上、P.2721V『舜子至孝変文』の前半部分とみなされ、また文体もP.2721Vの一部に六言を基調とする部分があったために、文体上でも共通する点があるとされ、結局P.2721Vと接続する散文体の作品とみなされてしまったために、「変文＝講唱体」という既存の考えに抗するための資料とはなりえなかったのであろう。そしてそれ以降、徐々に不完全な賦体、または散文と目される『舜子変文』は変文のなかでは例外的な存在となっていったのである。

例えば顔廷亮氏『敦煌文学概論』（1993年）で以下のように言っている。

変文中、只有《舜子变》通篇大体為六言韻語，体近故事賦；《劉家太子变》通篇為純散說，体近話本。与上述体制不合。有人認為，這表明故事賦、話本均可稱之變文。是否如此，尚待進一步研究。

日本では、金岡照光氏や入矢義高氏にも数篇の『舜子変文』に関する論稿が発表され、それらの中で金岡氏もまた舜子変文の文体には疑問を持たれていたことがわかる。金岡氏もまた基本においては講唱体が変文の基本的な文体と考えておられたからではあるが、ここでは単に「例外変文」と濁してしまうことはなく、講唱体から講唱に際して散文部分のみを抽出したものの可能性を指摘されるに至っている。この考えは、変文を講唱体であるとの考えから出発しているのであって、そうした点では筆者の考えと一致するもの

ではないが、『舜子変文』は実際の講唱に使用されるためのものであり、そうした講唱のために書かれた変文の発展過程における一段階を示しているものであるとの考え方は、きわめて示唆に富むものであると思われる。実のところ、こうした考えをもとに筆者は博士論文『敦煌変文写本的研究』⁷、ポストドクター報告書『敦煌講唱文学写本研究』⁸等の研究を展開したのであるが、これらの中にも詳述するように、筆者は変文とはある種の講唱文学活動において種本あるいは台本として用意されたもの、あるいはこうした講唱文学活動を通じてまとめられたものであり、近現代の講唱文学の台本などと同じように実際に演じられる場面の必要によって書き換えられることもしばしばであったと考えるに至っている。つまりはそうした用途で作られた以上、講唱体ではない変文が見つかることは、もともと何ら不思議なことではなかったと考えたのである。

筆者は、そうしたこれまでの研究を踏まえ、本稿ではさらに一步調査を進め、この S.4654『舜子変』および、P.2721V『舜子至孝変文』の文体について改めて考えてみたい。というのも、これらの変文では先にも言うように不完全な六言体に散文を交えるという様々な文体を混合させて継ぎはぎのように組み立てられている作品のように見られ、あるいはこれらが一つの作品を原形として、異なる内容を異なる文体で肉付けするかのよう発展しているようにも見られるからである⁹。こうした現象は、講唱文芸のなかで発展変化しつつある作品の一過程というように捉えることもできるであろう。これによって、『舜子変文』がこれまでに言われるような例外の変文ではなく、むしろ唐五代の通俗文学作品、変文の本質を捉えるうえで、きわめて重要な資料であることを以下に論じてみたい。

1. S.4654『舜子変』とその文体

『敦煌変文集』以降の翻刻に見られる『舜子変文』は S.4654 と S.2721V の2種の写本をつなぎ合わせたものである。前段の S.4654 部分は前半部分を残し、入話、舜の母が亡くなるくだりから継母によるはじめの虐待の途中までの部分が描写されている。後段の S.2721V は首部が欠けており、継母による数回にもおよぶ舜への虐待と、舜が家を出て歴山での生活、そして市場

での両親との再会から大団円までという後半部分が記載されている。内容より見るに、S.4654 部分と S.2721 は完全には接続しないものの、内容がおおむねつながるようになっており、またこの接続部分においては文体も類似しており、これによって『敦煌變文集』に「兩件雖非同一写本，銜接處殘欠似不多，整個故事，大致得以保全。」といわれるように同一作品とみなされ、校録されることになったのである。しかし、この点について一言付け加えておけば、金岡照光氏にも論考があるように、少なくともまったく同一作品、同一写本が分断されたものではないことは確かである。写本上も記載の状態、筆跡などより見ても同一の書き手とは思われない。文体より見ても、以下に指摘していくように S.2721 写本の方が後に書き加えられたと思しき箇所も多くなっている。

まず S.4654 の文体の分析結果より見てみたい。

S.4654 写本上に残される『舜子變』は、題目を除くと本文のみで全体で 22 行からなっている。奇妙な点としては、後ろにはまだ余白が残されているにもかかわらず、話しの途中で筆がおかれている点である。何らかの理由によって途中で中断され、その後も書き続けられることがなかったのであろう。用途についてもどのように講唱に使われたのかなどは不明であるが、ただ、本写本では、おもに語りものの種本とも思しき、故事の抄録、韻文の一部などが、集められ、貼り合わされたと思しき痕跡もあり、これまでには語り物の手控的な用途、つまり日本の「唱導書」あるいは「説草」のような用途によって作られたものであったとみることができる¹⁰。

S.4654 に収録される作品は以下の通りである。

S.4654

- R : 1 薛訶商人寄錫雁閣留題並序 / 25 (觀音願文) / 46 唐故歸義軍節度前都押衙充内外排使銀青光祿大夫檢校左散騎常侍兼禦史大夫上柱国豫章羅王道真贊並序 / 67 (大乘淨土讚) / 86 舜子變一卷 / 109 (仏説問答詩) / 143 (衆經要集金藏論) / 158 (經文注疏) / 204 (釈文) / (五更転) / (如来、諸菩薩功德文) 題記 : 大周広順四年 (954年)
- V : (河西大徳悟真法師等贈答詩) / (功德讚) / 悉達太子雪山修道讚文台本

／丈夫百歳篇／（正月孟春猶寒）／（丙午年粟等記帳本）／（慈惠郷百
 姓王盈子、王盈軍、王盈進、王通兒等家産相続訴状稿）／（敦煌昔日等
 七言詩）／（今日同遊上碧天等七言詩和五言詩幾首）

参考：『大乘浄土讃』前面に“舜曰”の一句有り。

このうちの『舜子変』は、原巻写本には標点も施されていないので読み方
 の違いによって句の数も異なってくるであろうが、解読していくとおおむね
 六言体を中心に 88 句によって書かれていることは明白である。韻はおもに
 “之”韻を主とし、ほかに“支”、“脂”、“哈”、“齊”、“魚”韻等を使ってい
 る。しかし、それでいながらこれまで時に不完全な六言体と称され、また散
 文とも称されてきた理由は、例外となる句も多く見られることにもあるが、
 なによりも散文部分を多く混入する S.2721 と同一作品とみなされたことに
 あるのであろう。

ここではまず六言句の例外となる句のみを抽出し、紹介してみたい。（全
 文については【資料 1】の S.4654 原文資料を参照されたい。）

		文字數	押 韻	
1	舜有親阿嬢在堂	7		
2	[人]問（問）疾病總有	5		
3	道了命終	4		
4	阿耶取一個計（繼）阿嬢來	9	○	
5	舜子抄手啓阿耶	7		
6	阿耶若得計（繼）阿嬢來◎	8	○	
7	也共親阿娘無貳	7		
8	苦嗽（瞽叟）娶得計（繼） 阿嬢	7		

9	遺我子勾當家事◎	7	○	
10	門前有一老人立地◎	8	○	
11	老人 [萬] 福尊體◎!	5	○	
12	老 [口] (人) 保 (報) 郎君	5		
13	後阿嬢見舜子跪拜四拜◎	10	○	
14	又不是時朝節日◎	7	○	
15	又不是遠來由喜◎	7	○	
16	政 (正) 午間跪拜四拜◎	7	○	
17	學得甚媿 (鬼) 禍述靡 (術 魅) ◎	7	○	
18	舜子叉手啓阿嬢	7		
19	遺舜子勾當家事◎	7	○	
20	兩拜助阿娘寒溫	7		
21	兩拜助阿娘同喜◎	7	○	
22	後阿嬢開道苦嗽 (瞽叟) 到 來◎	9	○	
23	阿嬢見後園果子◎非常	9	○	
24	豈不是於家了事◎	7	○	
25	我子是孝順之男	7		
26	豈不下樹與阿嬢看次 (刺) ◎	9	○	

以上、全体で 88 句によって構成されている文のうち、全体の 70.45%にあたる 62 句が六言で、残りの 29.55%にあたる上記表にある 26 句が例外ということになる。さらに表によれば、一字あまりの七言が 15 句と最も多く、

八言が2句、九言が4句で、その他四言1句、五言3句、十言が1句である。また第二番目の「[人]問(問) 疾病總有」のように、誤記によって一字脱落したと見られる例もある。これのみによっても、この作品にはもともと六言句の別作品が存在し、本写本ではこれを基礎として書き換えが行われていると推測されるわけである。

さらに、29.55%の六言以外の部分を精査すると、この推測はさらに確実性を増していく。たとえば、明らかに挿入句と見られる「道了命終」以外の25句においては、例外のうち64%にあたる16句までが他の六言句と同じ、あるいは近い韻を踏んでいる点である。

さらに、一文字だけ字あまりとなっている七言句では、不要とも見られる接頭辞などを用いているという共通点がみられている。そのもっとも多いケースとしては、「阿嬢」、「阿耶」などの「阿」字の使用である。敦煌変文でも「嬢」、「耶」と単音節でも使用されているケースは多いのであるが(「嬢」と「娘」は通用)、なんと26句中3分の2にあたる14句が使わなくともよい「阿」字を加えることによって字余りとなっているのである。この作品中では、実は「嬢」または「耶」と単独で使用される例はなく、それでいて六言句中でも「阿嬢」、「阿耶」とする用例もあることから、本来「嬢」、「耶」または「阿嬢」、「阿耶」の用法が不統一であったものを、本写本を筆写するとき統一したと見ることもできるかもしれない。ちなみに『大目乾連冥間救母変文』では同一写本上に「阿嬢」、「嬢嬢」を混用する例が見られており、『秋胡変文』などでも「阿娘」、「娘娘」、「娘」を同一作品上で混用している。ちなみに、もしこのケースを除外して考えれば、六言の占める割合は86.36%にまで上昇することになる。

またこれと類する問題であるが、主人公たる「舜」の呼称もS.2721Vでは「舜」、「舜子」と不統一であるが、S.4654では「舜子」と統一されている。これもあるいは統一を図るために「子」を加えた可能性もあろう。このケースには4例が当てはまる。

その他、字余りの句では句末の方向動詞「來」の使用や、「又」、「甚」、「正」、「豈不」などの強調や反語をあらわす副詞など(5例)、「是」の使用など、やや不確かではあるが使わなくとも意味の通る文字が多く使用されている点

も指摘できるであろう。六言句ではこれらのような語の使用例はないことも付け加えておきたい。

これらを総じて、この写本を筆写した書き手はもとの六言体を意識せずに写しているが、筆者はこの写本には背景となる六言体韻文が存在していたと見ることは間違いがないと考える。写本の書き手は、あるいはこの写本作成の目的として唱導書のように物語の内容のみを抽出することが第一にあり、筆写するときに文体にまでは配慮しなかったのではないかとも想像される。

2. P.2721V『舜子至孝変文』とその文体

上に見てきた S.4654 からは、全体にわたって韻を踏む六言賦体の影響が見られているが、P.2721V では少々様子が異なっている。というのも、P.2721V では前半部分は S.4654 と同様の韻を踏む六言体がベースとなっており、同じ六言体を書き換えたものと見ることができるのであるが、後半部分では徐々に六言体の比率が減り、最後には完全に四六調の古文体になっていくのである。もちろんここでは韻も踏んでいない。

この状況をより明瞭に示すために、ここに P.2721V『舜子至孝変文』全体を 10 段落に分け、以下に論じていきたい。(段落分けと原文については巻末の【資料 2】を参照。また第 1 段落は 1 句しか残されていないのでここでは統計では除外し、第 10 段落は七言体韻文なのでやはり除外する。)

単純に六言句の比率から見ても以下の通りである。

(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
85.19%	65.21%	79.17%	66.67%	72%	45.59%	46.67%
(9)	(10)					
15.91%	—					

【表 1】 P.2721V 各段落中に占める 6 字句の比率

また、S.4654 の場合と同じように六言に復元しうる可能性を持つものとして単純に五言句、七言句を許容範囲とした場合、比率は以下のように変わる。

(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
100%	82.61%	100%	100%	100%	51.47%	33.33%
(9)	(10)					
20.45%	—					

【表2】 P.2721V 各段落中に占める5～7字句の比率

各段落における押韻の状況も示しておきたい。各段落内での押韻の比率は以下のごとくである。

(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
14/27	22/46	16/24	18/45	15/25	16/68	—
51.85%	47.83%	66.67%	40%	60%	23.52%	0%
(9)	(10)					
—	—					
0%	0%					

【表3】 P.2721V 各段落中における押韻の状況

以上の3つの表によるに、総じて第2段落から第6段落までは概ねにおいて S.4654 の数値と一致しているといつてよい。とりあえずは第6段落までは S.4654 と同様に同じ六言体が土台にあると見てよいようである。ところが、第7段落では急激に六言体の比率が下がり、押韻の比率も同様に低下している。第7段落の文体は賦体と四六文の混合体ともいえ、第8段落と第9段落では六言句を交えてはいるものの韻も踏まず、異なる文体であると言える。

次に文体の異なっている部分について具体的に見てみたい。【表1】と【表2】によれば、第3段落と第7段落で極端に六言句の比率が低下しているのであるが、これは異なる文体を挿入しているのが主たる原因となっている。

第 3 段落の六言句以外の句が集中する箇所は以下の通りである。

象兒取得荊杖到來，數中揀一條羸物，約重三兩便下是。把舜子頭髮，懸在中庭樹地，從項決到脚啾，鮮血遍流灑地。

舜子是孝順之男，上界帝釋知委，化一老人，便往下界來至，方便與舜，猶如不打相似。

さらに第 7 段落の例外部分は以下の通りである。

舜聞濤（洶）井，心裏知之，便脫衣裳井邊，跪拜入井濤泥。上界帝釋密降銀錢伍百文入於井中。舜子便於泥罇中置銀錢，令後母挽出。數度訖，上報阿耶孃。

阿耶不聽，拽手埋井。帝釋變作一黃龍，引舜通穴往東家井出。舜叫聲上報，恰值一老母取水，應云……

老母便與衣裳串（穿）着身上，與食一盤喫了。報舜云：「汝莫歸家，但取你親阿孃墳墓去，必合見阿娘現身。」說詞已了，舜即尋覓阿孃墓。見阿孃真身，悲啼血。阿娘報言舜子：「兒莫歸家，兒大未盡。但取西南角歷山躬耕，必當貴。」

以上のように、比較的長文による挿入が見られている点には注目に値する。その挿入文に見られる説話の内容には帝釈天信仰など九、十世紀の時代的特色、民俗が描写されており、それが写本作成の時期にも重なることから、この頃の筆写の際に挿入されたことが推測される。この点については後に詳述する。

さらに第 8、9 段落の舜子が家を離れて歴山へ行き一人農地を耕し生活するくんだりから市場へと米を売りに行き両親と再会するくだりまでにおいてはそれまでの六言体の痕跡は見られなくなっている。説話の内容から言えば第

7段落と第8段落では違和感なく接続されているが、文体から見た場合、じつはここで大きく変化しているのである。

以上に、P.2721Vの文体を分析してきたが、説話内容としては一見して接続の良い1つの物語のようにつくられているが、その文体からは、かなりの不自然さを感じさせるものである。第2～7段落目までは六言体の作品をもとに加工されたと見てよく、第7段落目では加工の度合いがかなり増し、第8、9段落では一気に文体を四六句の古文体に変わってしまっているのである。その原因は、当時の信仰や流行によって挿入文が入ったり他の物語のプロットを混入させたりしていることによると予想される訳であるが、この点を後節において説明していきたい。

3. P.2721V からみた『舜子変』の変容

以上にみてきたように、まず S.4654 の記載によって、『舜子変文』成立の背景に六言体の作品が存在していたことはあきらかである。また P.2721V では同様の六言体作品を土台としながら、多くの挿入部分を交えており、最後には別の文献をつなぎ合わせて作品を作っていることも分かった。

続く問題は、上に見てきたような推測をさらに立証していくことである。とくに P.2721V の書き換えにおいて、どのような作品あるいは伝承、信仰をもとに、いつごろ書き換えられていったかという問題はきわめて重要であるように思われる。

まず、時代による舜子説話の変容の過程を知るために、古典文献中に見られる舜の物語について見ていきたい。

これまで、舜子の孝子物語を残す資料には、代表的なものに『古文尚書』、『孟子』、『史記』と、ほかに『論衡』（巻第二吉駟）、『越絶書』、『釋史』、『尚史』、『宋書』などがある。

『古文尚書』（堯典）における関連個所の記載は以下の通りである。

（堯）帝曰、咨四岳。朕在位七十載、汝能庸命、巽朕位。岳曰、否德忝帝位。曰、明明、揚側陋、師錫帝曰、有齔在下、曰虞舜。帝曰、兪、予聞、如何。岳曰、瞽子、父頑、母嚚、象傲、克諧以孝、烝烝乂不格姦。

帝曰、我其試哉。女于時、觀厥刑于二女。釐降二女于媯汭、嬪于虞。帝曰、欽哉。

『史記』（五帝本紀）にも類する記載があるが、長編にわたるため、関連する部分を抜粋しておく。

虞舜者、名曰重華。重華父曰瞽叟、瞽叟父曰橋牛、橋牛父曰句望、句望父曰敬康、敬康父曰窮蟬、窮蟬父曰帝顓頊、顓頊父曰昌意：以至舜七世矣。自從窮蟬以至帝舜、皆微為庶人。

舜父瞽叟盲、而舜母死、瞽叟更娶妻而生象、象傲。瞽叟愛後妻子、常欲殺舜、舜避逃；及有小過、則受罪。順事父及後母与弟、日以篤謹、匪有懈。

舜、冀州之人也。舜耕歷山、漁雷沢、陶河濱、作什器於壽丘、就時於負夏。舜父瞽叟頑、母嚚、弟象傲、皆欲殺舜。舜順適不失子道、兄弟孝慈。欲殺、不可得；即求、嘗在側。

舜年二十以孝聞。三十而帝堯問可用者、四嶽咸薦虞舜、曰可。於是堯乃以二女妻舜以觀內、使九男与処以觀其外、舜居媯汭、內行弥謹。堯二女不敢以貴驕事舜親戚、甚有婦道。堯九男皆益篤。舜耕歷山、歷山之人皆讓畔；漁雷沢、雷沢上人皆讓居；陶河濱、河濱器皆不苦窳。一年而所居成聚、二年成邑、三年成都。堯乃賜舜絺衣、与琴、為築倉廩、予牛羊。瞽叟尚復欲殺之、使舜上塗廩、瞽叟從下縱火焚廩。舜乃以兩笠自扞而下、去、得不死。後瞽叟又使舜穿井、舜穿井為匿空旁出。舜既入深、瞽叟與象共下土实井、舜從匿空出、去。瞽叟、象喜、以舜為已死。象曰：“本謀者象。”象与其父母分、於是曰：“舜妻堯二女、与琴、象取之、牛羊倉廩予父母。”象乃止舜宮居、鼓其琴。舜往見之。象愕不懌、曰：“我思舜正鬱陶！”舜曰：“然、尔其庶矣！”舜復事瞽叟愛弟弥謹。於是堯乃試舜五典百官、皆治。

また『孟子』（萬章）にもこの説話に関連する記載が見られている。

萬章曰：“父母使舜完廩，捐階，瞽瞍焚廩。使浚井，出從而揜之。
象曰：‘謨蓋都君咸我績，牛羊父母，倉廩父母，干戈朕，琴朕，豎朕，
二嫂使治朕棲。’象住入舜宮，舜在牀琴。象曰：‘鬱陶思君尔。’忸怩。
舜曰：‘惟茲臣庶，汝其于予治。’不識舜不知象之將殺已与？”

興味深いことに、『宋書』（巻第 27 符瑞志）の描写では、それまでに見られなかった虚構の描写が加えられている。

舜父母憎舜，使其塗廩，自下焚之，舜服鳥工衣飛去；又使浚井，自上填之以石，舜服龍工衣自傍而出。

これらよりみても、古くから舜子を主人公とする孝子物語が語られてきたであろうことは推測に難くない。現に『孝子伝』なる文献が存在し、董永などの故事とともに流通していたことも間違いがないのである。そうしたなかで、それぞれの典籍に残される説話では細部において若干の差異がみられるのは、背景にある伝承が時代によって変化したのが原因であろう。こうして基本となる説話のプロットに徐々に描写を加えて発展していったということは、『宋史』に見られるような描写の追加などよりみても明らかであろう。

これらの歴代の記載に共通しているのは以下のような点であろう。

- ①舜子の孝行が主題となること。
- ②舜が父母から虐待を受けること。その虐待の方法に以下の2つがある。
 - a.倉を修理させ焼き殺そうとするところ。
 - b.井戸を掘らせ埋め殺そうとするところ。

こうした点は、『孟子』のなかの描写でもすでに見られ、変文にいたるまで一貫している。変文ではさらに虐待の方法を増やし、あらたな筋書きも加わり、説話は複雑化している。こうした説話の複雑化は、通俗説話発展の過程で徐々に起こっていったものであろう。変文までにおいて発展変化してあらたに付け加えられた内容は以下の通りである。

A.舜が母を傷つけたと信じた父親は、舜を鞭で打つが、舜は帝釈天に救われる。

B.舜は井戸を浚渫している時に生き埋めにされるが、帝釈天に救われる。

C.隣家の老女に言われて生母の墓地へ行くと亡き母の霊と再会することができた。そして母に家を出るよう命ぜられる。

D.家を出たのち、歴山へ行き田を耕し、孝子の徳を以て成功した。

E.米を売りに市へ来て父母に再会し、両親は改心する。

先にも言うように、これらの個所は説話伝承の発展において、何らかの意図によって後代に書き換えられた部分と言ってよいわけであるが、こうした変文の成立以前に書き加えられたと見られるいくつかの箇所において、先に言う六言句が減少する部分と一致している点には注目しておきたい。たとえば、舜が虐待される描写の中で「舜を木に吊って鞭で打ち、帝釈天に救われる」という内容や、「舜は井戸を浚渫している時に生き埋めにされるが、帝釈天に救われる」の部分において文体が変わっている（挿入文によっている）ことについては前節にも述べたことである。より具体的には、P2721Vの第7段落の「舜は井戸を浚渫している時に生き埋めにされるが、帝釈天に救われる」のくぐりでは、前半部分と後半の帝釈天が登場する部分では前半部分の六言句の占有率が57.5%であるのに対して、後半部分では帝釈天の記述に③の内容も加わり、22.22%にまで下がっているのである。

何よりもここで現れる帝釈天というのは、いうまでもなく仏教の東漸によって後代にインドより中国に流入したインドの神であり、本来、中国古代の舜子の説話に登場するはずがない神である。帝釈天信仰の東漸は比較的早い時期だったと見られ、『長阿含経』（後秦訳出）中にはすでに六斎日（月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日）において帝釈天が四天王、太子を派遣して民間を巡邏、監督させた等の記載が見えており、民間において帝釈天に対する信仰は早くから中国に伝わっている。このような信仰がいつごろ変文に混入していったのかはこれだけでは説明しきれないが、興味深いことに、九、十世紀の敦煌ではこの帝釈天信仰がたいへん流行していたこ

とがこれまでの研究で分かっている。敦煌文献の九、十世紀文献にもこうした帝釈天信仰の痕跡が多く残されており、先の六齋日信仰が十齋日へと発展して預修齋も整備され『閻羅王預修生七往生淨土經（十王經）』へと発展していくのはまさにこの時代なのである¹¹。『舜子変文』写本が筆写された年代もまさにこの時期に重なっているのであって、九、十世紀にそうした信仰を背景に書き換えられたと考えることは十分に可能であろう。

ほかに、D、E のような内容は他の典籍中に見られないものであり、これらも後代の発展変化のなかで加わったものである。

D、E のようなシーンは、ほとんどの典籍に見られないものであるが、ただ『孝子伝』（成書年代不詳、『法苑珠林』に引用される）にはよく似た描写が見えている。

舜父有目失始時微微。至後妻之言，舜有井穴乏。舜父在家貧厄，邑市而居。舜父夜卧，夢見一鳳凰，自名為雞，口銜米以哺。已言雞為子孫視之是鳳凰。黃帝夢書言之，此子孫當有貴者，舜占猶也。比年糴稻，穀中有錢，舜也。乃三日三夜，仰天自告過。因至是聽常与市者声故，一人。舜前舐之，目霍然開。見舜感傷市人，大聖至孝道，所神明矣。

『大正大藏經』、第 53 卷、頁 658 下段。

この『孝子伝』系統の写本は敦煌文献中に数点数系統のものが見つかっており、舜子説話としては S.389 と P.2621 の 2 点に残されている。この 2 写本は異なる流布の系統のようで、おおむねの説話の筋書きは一致しているが、異なる表現を使っている。これら 2 写本によって舜子説話が九、十世紀においてどのように伝承されていたのかを知ることができるのである。

それらを見るに、内容はほぼ 2 系統のどちらも『史記』などの典籍上の記載と基本的な筋書きは一致しているが、ただ上記の D、E のシーンが加えられ、文体は四六を基調とする古文体で書かれてある。これが、P.2721V『舜子至孝変文』の第 9、第 10 段落の描写を P.2621 写本の該当部分と比較してみると、なんとこれらの描写が酷似していることが分かるのである。

P.2721V 『舜子至孝變文』
舜來歷山，俄經十載，便將米往本州，
至市之次，見後母負薪，詣市易米。
值舜糶於市，舜識之，便糶與之。
舜得母錢，佯忘安着米囊中而去。
如是非一，瞽叟怪之，語後妻曰：
“非吾舜子乎？”妻曰：“百丈井底埋却，
大石擋之，以土填却，豈有活理？”
瞽叟曰：“卿試牽我至市。”妻牽叟詣
市，
還見糶米少年，叟謂曰：“君是何賢人，
數見饒益。”舜曰：“見翁年老，
故以相饒。”叟耳識其聲音，曰：
“此正似吾舜子聲乎？”舜曰：
“是也。”便即前抱父頭，失聲大哭。
舜子拭其父淚，與（以）舌舐之，兩目即
明。
母亦聰慧，弟復能言。市人見之，
無不悲嘆。

P.2621 『孝子伝』
經十年不自存立，
後母負薪，向市易米。
值舜糶米，於是舜見識之，遂便與[米]，
佯不敢取錢，
如是非一，叟怪之，語妻曰：
氏(是)我重華也。”妻曰：“百尺井底，
大石鎮之，豈有治(活)理？”
叟曰：“卿但牽我至市，觀是何人。”其妻
於是將叟至，
叟曰：“據子語音，
正似我兒重華。”舜曰：
“是也。”於是前抱父大哭，哀動天地。
以手拭其父淚，兩目重聞(明)。
母亦聽(聰)慧，弟復能言。市人見之，
無不悲嘆。

このように比較して見るとよく分かるように、P.2721V の第 9 段落部分は P.2621 のような『孝子伝』系統的な作品を継ぎはぎにしていることが分かるのである。

同じような部分がもう一箇所ある。P.2721V の第 10 段落の韻文と S.389 『孝子伝』舜子故事の最後に残されている韻文も比較してみよう。

P.2721V 『舜子至孝變文』
其詩曰：
瞽叟填井自目盲，舜子從來歷山耕。
將米糶都逢父母，以舌舐眼再還明。

S.389 『孝子伝』
詩云：
瞽叟填井自目盲，舜子從來歷山耕。
將米糶都逢父母，以舌舐眼再還明。

又詩曰：

孝順父母感於天，舜子濤（洵）井得銀錢。
父母拋石壓舜子，感得穿井東家連。

又詩云：

孝順父母感于天，舜子濤（洵）井得銀錢。
父母拋石壓舜子，感得穿井東家連。

P.2721V と S.389 の 2 点の写本に記載されている韻文は完全に一致しており、S.389『孝子伝』系統の作品をやはり継ぎはぎにしていることがわかるのである。

これを通じて、P.2721V『舜子至孝変文』はもと六言体の故事を基調とした作品であったが、作品が書き換えられていく中で 2 系統の『孝子伝』をとりいれて、継ぎはぎのようにして作られているものであることが分かる。

このように舜子変文の変容の過程を見ると、敦煌の同じ『孝子伝』に収録される董永故事の変容にも同じような現象が見られていることを想起させる。というのも、故事のストーリーより見た場合、S.2204 の『董永変文』は、『孝子伝』中の董永の話と田崑崙の 2 つの話を継ぎはぎにして作られているのである。董永故事は後に『董永遇仙記』（『清平山堂話本』雨窗集）、『小董永売身宝卷』、そして現代の黄梅戯『天仙配』などへと発展するが、その過程においても多くの異なる物語を吸収する形でストーリーが長編化するという一面もある。この『董永変文』も董永故事の発展の中のそうした一過程とみることができるといふことであろう。総じて、敦煌の変文作品からは、講唱の現場に使用されていた文献ということ、自在に加筆訂正をされていた状況を見ることができるといふことである。こうした点から、我々は改めて伝世文献とは異なる出土文献という性質を強く認識すべきであろう。

4. 小結

最後に、変文の定義に関する問題に一言触れておきたい。筆者が前言でも述べたように、変文が研究されるときにはおおく変文の体制は講唱体であるというという前提で行われ、『舜子変』、『舜子至孝変文』の写本に記載される「変」、「変文」は、「它們（筆者注：『舜子変』と『劉家太子変』）同属说唱文学，在发展演变过程中，难免要相互借鉴、影响，以至相互渗透，体制上开始转化，出现了中间状态，而在题名上却仍旧保持了原有类称，遂出现了这种

“名”与“実”間的矛盾。」¹²のように扱われているのである。

しかし、これに対して筆者が強調したいのは、講唱文学というのは止まることなく変化し続けているということである。筆者の前述するような検証によって、S.4654 と P.2721V も六言の賦体から発展したことも明らかとなった。これらは講唱体から発展してきたわけではないし、あるいは物語の内容を主として書き残そうとする姿勢から、異なる文献から異なる文体の記述を継ぎはいで、文体としては不揃いなものとなっているのであるが、そのような写本にも S.4654 写本上の真題「変」、P.2721V 上の「変文」のように、変文として扱われていたということである。もう一つ付け加えれば、同じように継ぎはぎのように文を組み立てていくということは、講唱体自体にも多く見られている。講唱体の散文部分には様々な文体が混入しているものも多く見られ、さらに言えば韻文の位置が動かされたりするようなこともしばしば見られる。これらを通じて、変文は講唱文学の発展の中である段階において講唱体へと発展したのであるが、それは発展の中の一段階でのことであって、それをもって変文は必ず講唱体であるということには繋がらないのではないのか。変文成立の年代については様々な議論があり、少なくとも九世紀に流行していたことは様々な資料から間違いのないところである。しかし敦煌の講唱体文献を調査する中で、講唱体は九世紀以前の文献には見られず十世紀文献になってようやく見られるのである。こうしたタイムラグも、変文の変化発展の中で十世紀になって講唱体という体裁へ発展したのではないかと考えると、収まりが良いように思われないか。

このように見た場合、S.4654 と P.2721V も例外変文などではなく、変文の発展の一段階を示しているのとらえられるべきであろう。変文の指し示している含意も、現在学术界で言われる定説よりはさらに柔軟であるべきではないだろうかと思える次第である。

〔資料一〕 S.4654 《舜子變》

姚(堯)王里(理)化之時◎，日洛(落)千般祥瑞，舜有親阿孃在堂，樂登夫人便是◎。樂登夫人染疾◎，在床三年不豈(起)◎，夫人喚言苦瘦(瞽叟)：“妾有姑(孤)男姑(孤)女◎，流(留)在兒婿手頂(底)◎，願夫莫令邊(鞭)恥◎。”苦嗽(瞽叟)報言娘子◎：“〔人〕問(問)疾病總有，夫人大須攝治◎。”道了命終。舜子三年池(持)孝，淡服千日寡(掛)體◎。

苦嗽(瞽叟)喚言舜子◎：“我舜子小(少)失却阿孃，家裏無人主領。阿耶取一個計(繼)阿孃來◎，我子心里(裏)何似？◎”舜子抄手啓阿耶：“阿耶若得計(繼)阿孃來◎，也共親阿孃無貳。”

苦嗽(瞽叟)娶得計(繼)阿孃，不經旬日中間，苦嗽(瞽叟)喚言舜子◎：“寮(遼)陽城兵馬下，今年大好經記(紀)◎。阿耶暫到寮楊(遼陽)，沿路覓些些宜利◎，遺我子勾當家事◎。”

去時只道壹年，三載不歸宅李(裏)◎，兒逆阿耶長段(腸斷)，步琴悉(膝)上安智(置)◎。舜子府(撫)琴忠(中)間，門前有一老人立地◎。舜子即忙出門：“老人〔萬〕福尊體◎！老人從何方而來◎？”老□(人)保(報)郎君：“昨從寮楊(遼陽)城來◎，今得阿耶書信。”舜子走入宅門，跪拜阿孃四拜◎。

後阿孃見舜子跪拜四拜◎，五讀(毒)嗔心便豈(起)◎：“又不是時朝節日◎，又不是遠來由喜◎。政(正)午間跪拜四拜◎，學得甚媿(鬼)禍述靡(術魅)◎！”舜子叉手啓阿孃：“阿耶暫到寮楊(遼陽)，遣舜子勾當家事◎。去時即來一年，三載不歸宅里(裏)。兒逆阿耶腸段(斷)，步琴悉(膝)上安智(置)◎。舜子府(撫)琴忠(中)間，門前有個老人，昨從寮楊(遼陽)城來◎，今得阿耶書信，兩拜助阿孃寒溫，兩拜助阿孃同喜◎。”後阿孃聞道苦嗽(瞽叟)到來◎，心里(裏)當時設計◎，高聲喚言舜子◎：“實若是阿耶來◎，家里(裏)苦無供備。阿孃見後菌菓子◎非常，最好紅桃先(鮮)味◎。我若摘(摘)得桃來◎，豈不是於家了事◎！”舜子問(問)道摘桃，心裏當時歡喜◎。舜子上樹摘桃，阿孃也到樹底◎。解散自家頭計(髻)◎，

拔取金釵手裏◎，次（刺）破自家脚上，高聲喚言舜子◎：“我子是孝順之男，豈不下樹與阿孃看次（刺）◎。”舜子忽聞次言，將爲（謂）是真無爲（偽）◎，舜子即忙下樹。

〔後缺〕

* 指的是重複段部分。

* _____是非六言句。

*◎是押韻。

〔資料二〕S.2721V《舜子至孝變文》

〔前缺〕

（1）房中臥地不起。

（2）不經三兩□□，□□□（瞽）叟來至。瞽叟入到宅門，直到自家房□，□後妻向床上臥地不起。瞽叟問言娘子：“前後見我不歸，得甚能歡能喜？今日見我歸家，床上臥地不起，爲復是鄰里相爭，爲復天行時氣？”後妻忽聞此言，滿目堆堆下淚。“自從夫去遼陽，遣妻勾當家事，前家男女不孝，見妾後園摘桃，樹下多埋（埋）惡刺，刺我兩脚成瘡，疼痛直連心髓。當時便擬見官，我看夫妻之義。老夫若也不信，腳掌上見有濃（膿）水。見妻頭黑面白，異生豬狗之心。”

（3）瞽叟喚言舜子：“阿耶暫到遼陽，遣子勾當家事，終甚於家不孝？阿孃上樹摘桃，樹下多埋惡刺，刺他兩脚成瘡，這個是阿誰不是？”舜子心自知之，恐傷母情；舜子與招伏罪過，又恐帶累阿孃。“己身是兒，千重萬過，一任阿耶鞭恥。”瞽叟忽聞此言，聞嗔且不可嗔，聞喜且不可喜，高聲喚言象兒：「與阿耶三條荆杖來，與打殺前家歌（哥）子。」〔象〕兒〔聞〕道取荆杖，走入阿孃房裏，報云：[“阿耶交（教）兒取杖，打殺前家歌（哥）子！”]後妻報言瞽叟：“男女罪過須打，更莫交（教）分疏道理。”象兒取得荆杖到來，數中揀一條麤物，約重三兩便下是。把舜子頭髮，懸在中庭樹地，從項決到脚啣，鮮血遍流灑地。瞽叟打舜子，感得百鳥自鳴，慈烏灑血不止。舜子是孝順之男，

上界帝釋知委，化一老人，便往下界來至，方便與舜，猶如不打相似。舜即歸來書堂裏，先念《論語》、《孝經》，後讀《毛詩》、《禮記》。

(4) 後阿孃亦(一)見舜子，五毒嗔心便起。“自從夫去遼陽，遣妻勾當家事。前家男女不孝，東院酒席常開，西院書堂常閉，夜夜伴涉惡人，不曾歸來宅裏，買(賣)却田地莊園，學得甚鬼禍術魅！大杖打又不死，忽若堯王敕知，兼我也遭帶累。解士(事)把我離書來，交(教)[我]離你眼去。”瞽叟報言娘子：“他緣人命致重，如何打他鞭恥？有計但知說來，一任與娘子鞭恥。”後妻報言瞽叟：“不鞭恥萬事絕言，鞭恥者全成小事。”

(5) 不經兩三日中間，後妻設得計成。妻報瞽叟曰：“妾見後院空倉，三二年來破碎。交(教)伊舜子修倉，四畔放火燒死。”瞽叟報言娘子：“娘子雖是女人，設計大能精細。”瞽叟喚言舜子：“阿耶見後院倉，三二年破碎，我兒若修得倉全，豈不是兒於家了事。”舜子問道修倉，便知是後阿孃設計，調和一堆泥水，舜子叉手啓阿孃：“泥水生治不解，須得兩個笠子。”後阿孃問瞽叟曰：“是你怨(冤)家修倉，須得兩個笠子。大(待)伊怨(冤)家上倉，不計是兩個笠子，四十個笠子也須燒死！”舜子纔上得倉舍，西南角便有火起。弟一把是阿得(後)孃，續得瞽叟弟二，弟三不是別人，是小弟象兒。即三具火把鎗脚燒，且見紅焰連天，里(黑)煙不見天地。舜子恐大命不存，權把二個笠子爲馮，騰空飛下倉舍。舜子是有道君王，感得地神擁起。遂燒毫毛不損。歸來書堂院裏，先念《論語》、《孝經》，後讀《毛詩》、《禮記》。

(6) 後阿孃又見舜子，五毒惡心便起：“自從夫去遼陽，遣妾勾當家事，前家男女不孝，東院酒席常開，西院書堂常閉，夜夜伴涉惡人，不曾歸來宅裏。買(賣)却田地莊園，學得甚崇禍術魅，大杖打又不[不]殺，三具火燒不死，忽若堯王敕知，兼我也遭帶累。解事把我離書來，交(教)我離你眼去。”瞽叟報言娘子：“緣人命致重，如何但修理他？有計但知說來，一任與娘子鞭恥。”後妻報言瞽叟：“不鞭恥萬事絕言，鞭恥全成小事。”

(7) 【前段】不經旬日中間，後妻設得計成：“妾〔見〕廳前枯井，三二年來無水。交(教)伊舜子淘井，把取大石填壓死。”瞽叟報言娘子：“娘子雖是女人，設計大能精細。”高聲喚言舜子：“阿耶廳前枯井，三二年來〔無〕水，汝若淘井水出，不是兒於家了事？”舜聞濤(淘)井，心裏知之，便脫衣裳井邊，跪拜入井濤泥。上界帝釋密降銀錢伍百文入於井中。舜子便於泥罇中置銀

錢，令後母挽出。數度訖，上報阿耶孃：「井中水滿錢盡，遣我出着，與飯一盤食者，不是阿孃能德？」後母聞言，於瞽叟詐云：「是你怨（冤）家有言：『不得使我銀錢，若用我銀錢者，出來報官，渾家不殘性命！』」瞽叟即便與（以）大石填塞。後母一女把着阿耶：「殺却前家歌（哥）子，交（教）與甚處出頭？」阿耶不聽，拽手埋井。【後段】帝釋變作一黃龍，引舜通穴往東家井出。舜叫瞽上報，恰值一老母取水，應云：「井中是甚人乎？」舜子答云：「是西家不孝子。」老母便知是舜，牽挽出之。舜即泣淚而拜，老母便與衣裳串（穿）着身上，與食一盤喫了。報舜云：「汝莫歸家，但取你親阿孃墳墓去，必合見阿娘現身。」說詞已了，舜即尋覓阿孃墓。見阿孃真身，悲啼血。阿娘報言舜子：「兒莫歸家，兒大未盡。但取西南角歷山躬耕，必當貴。」

（8）舜取母語，相別行至山中，見百餘頃（頃）空田，心中喫噎。種子犁牛，無處取之。天知至孝，自有郡（群）豬與（以）芻耕地開墾，百鳥銜子拋田，天雨澆溉。其歲天下不熟，舜自獨豐，得數百石穀米。心欲思鄉，擬報父母之恩。行次臨河，舜見一郡（群）鹿，嘆云：「凡為人身，遊鹿不相似也！」泣淚呼（吁）嗟之次，又見商人數個，舜子問云：「冀郡姚家人口，平善好否？」商人答云：「姚家千萬，阿誰識你親情？有一家姚姓，言遣兒濤（淘）井，後母嫉之，共夫填却井殺兒。從此後阿耶兩目不見，母即頑遇（愚），負薪詣市。更一小弟，亦復癡顛，極受貧乏，乞食無門。我等只識一家，更諸姚姓，不知誰也。」舜子當即知是父母、小弟也。心口思惟，口亦不言。

（9）舜來歷山，俄經十載，便將米往本州，至市之次，見後母負薪，詣市易米，值舜糶於市，舜識之，便糶與之。舜得母錢，佯忘安着米囊中而去。如是非一，瞽叟怪之，語後妻曰：「非吾舜子乎？」妻曰：「百丈井底埋却，大石樁之，以土填却，豈有活理？」瞽叟曰：「卿試率我至市。」妻牽叟詣市，還見糶米少年，叟謂曰：「君是何賢人，數見饒益？」舜曰：「見翁年老，故以相饒。」叟耳識其聲音，曰：「此正似吾舜子聲乎！」舜曰：「是也。」便即前抱父頭，失聲大哭。舜子拭其父淚，與（以）舌舐之，兩目即明。母亦聰慧，弟復能言。市人見之，無不悲嘆。

（10）其詩曰：

瞽叟填井自目盲，舜子從來歷山耕。

將米冀都逢父母，以舌舐眼再還明。

又詩曰：

孝順父母感於天，舜子濤（淘）并得銀錢。

父母拋石壓舜子，感得穿井東家連。

註

¹本論文は、2005年10月に台湾の台北大学で開催された第七届唐代文化學術研討会発表の「從舜子變文類写本の改写狀況來探討五代講唱文學的演化」、および同年12月出版の『敦煌學』（第26輯）に掲載された同名論文の翻訳文である。ただしこの研究方面では新たな研究成果も発表されているので、新たに気づいた点など加筆訂正した箇所がある。

²説話研究、『孝子伝』研究の角度から舜子變文にふれるものには、川口久雄氏「敦煌本舜子變文・董永變文と我が国説話文學」（『東方學』40、1970年）、坪井直子氏「舜子變文と『二十四孝』」（仏教大学大学院紀要29、2001年）などがある。

³敦煌變文の文体研究としては、栢尾武氏「敦煌變文孝子伝と舜子變の比較」（桜桜美林大学中国文學論叢1、1968年）、金岡照光氏「敦煌本舜子變再論補正一附斯坦因4654本校勘訳註」（東洋大学紀要文學部篇26、1972年）などがある。

⁴劉復氏『敦煌掇瑣』では、他に變文としてはP3048『醜女縁起』、P3213『伍子胥』（『伍子胥』はのちに伍子胥變文と呼ばれる）P2794『伍子胥』なども収録している。

⁵この時代の研究書、研究論文などの刊行物ばかりではなく、吉川幸次郎「李笠翁のこと」（『石川淳全集』月報）など当時の学会を追想する文などにその当時の事情がしばしば記される。

⁶上記の点については、拙稿「敦煌文献和變文研究回顧」（『敦煌吐魯番研究』7、中華書局、2004年）に詳述したことがある。

⁷華林博論叢書、中華書局、近刊予定。

⁸浙江大学古籍研究所中国古典文學研究叢書、中華書局、2010年。

⁹この点については、初歩的な考えを拙稿「敦煌變文研究概述以及新觀點」（『華林』3、中華書局、2004年）においてすでに指摘したことがある。

¹⁰日本の「説草」については、永井義憲氏「『発心集』と説草」（『説話文學研究』10、1975年）、「説草と仏教説話集の成立」（『仏教文學』、1979年）、「説草考」（『国文學解釈と鑑賞』平成5年12月号、1993年）等を参照。

¹¹拙稿「大足宝頂山石窟『地獄変龕』成立の背景について」、『絵解き研究』

16、絵解き研究会、2002年。

¹² 顔廷亮氏主編『敦煌文学概論』、甘肅人民出版社、1993年。